子どもスポーツのコスモロジー
—社会的スキル形成の可能性と限界—

山 本 清 洋

(1998年10月15日 受理)

A cosmology of child's sport
- Possibility and limitation of building social skills -

Kiyohiro YAMAMOTO

Summary

It point out that it is important to build a social skills for solving many child's deviant activities. These social skills are built as a result of child's many experiences of human relationship among family group, community, school group and meadia society. A social skill built in only sport society have limitation because of social skills are complex units built in above fore different groups. It make not clear whether experiences in organized spot are more benefit for building social shill compare with nonorganized sport. In discussing on building of socail skills related to sport society, we ought to have two view points. The first view point is to focus on a human relationship of sport society, and the secound is to focus whether sport structure has many kinds of free human relationship in it or has not.

After above discusing, first, the cosmology of child's sport consisted of child's inner universe, child's own sport, sport socializing child and sport society, is useful frame work to make clear a posibility and limitation of building social skill.

As the result of interpreting on child's experiences among child's own sport and aport socizlizing child and sport society, it made clear that child's own sport had more chances in which child could corelated with many other children under free atmosphere. Therefore social skills are built more easily in experiences of child's own sport compare with socializing child sport (organized sport). A chances for building social skills in socializing child sport (organized sport) are depending on corelationship between coach and child.

はじめに

多くの人の共感を読んだアリエスの「子どもの誕生」[1]が示すように，＜子ども＞という概念は大人が「子どもとは・・・である」と規定した枠組みから見える限りのものであり，換言すれば，あるテクストの中で子どもを対象化した結果見えてきた＜子ども＞であると言える。テクストの視点からは⑴子どもを表現した言葉や映像，⑵それらが表現しているイメージや意味，そして⑶現実世界で出合う実在する子どもに分類できる[2]。現代の子どもは変貌した，という際の子どもはいずれに対応させたものなのか？，あるいは1980年代からの異文化として捉えられた子どもはどうなのか？等の問いかけへの解は未だに曖昧である。＜子どもとは本質的にイノセンスである＞という子どもの概念は，子どもによる殺人や援助交際により無惨にも喰いちぎられているし，学校不登校やいじめは大人が理解した＜子ども＞の枠を越えている現象である。根底には現代文明での人間存在の揺らぎがあるこれらの諸現象が生じる要因を解明するために多くの試みがなされ，その一つとして子どもが生きる生活空間で子ども同士の人間関係や子どもと大人のそれが閉ざされていることが指摘されている。また，そのような閉ざされた人間関係の結果として子どもの社会的スキルが未熟な状態にあることも報告されている。そうなると，子どもの社会的スキルを豊かに養うことが必要になる。現実には，子どもは，⑴家庭空間，⑵子どもが参与する地域の集団（以下地域集団），⑶学校空間，さらに，⑷間接的空間でありながら強い影響を与えるメディア空間の中でさまざまな人間関係を経験し，社会的スキルを学習し身につけていく。同時にそれぞれの空間での人間関係のありようが互いに影響しあう中で自己の社会的スキルを身につけていくことになる。従って，一つの生活空間やその空間での文化に関係づけて社会的スキル形成を論じるには自ずから限界がある。ただ，現在の子ども現象の根本的な解消には至らないにしても，子どもを育てる任にある大人社会が何等かの方法で子どもの社会性を形成することは肝要なことである。本論では，⑵地域の集団と⑶学校空間において子どもの重要な文化の一つであるスポーツに焦点を当ててスポーツ空間での社会的スキル形成について論じてみる。

Ⅱ　本論が採用する枠組み及び分析・検討の資料

分析枠組みとして＜子どもスポーツのコスモロジー＞を採用する。現代社会での子ども文化現象を分析，検討，解釈する際に，教育，発達，社会化という概念では限界があるという批判・指摘がなされ，子ども社会学，子ども学，教育社会学等であたらしい概念を構築する作業が1980年代から行われている。＜子ども文化のコスモロジー＞の概念は子ども文化現象を分析する際に，文化人類学的発想に依拠し構築されたものであり，＜子どもスポーツのコスモロジー＞はその概念をスポーツ文化へ応用して創られたものである。

分析，検討の際に用いた子どもスポーツの資料は以下の調査，観察で得たものである。

⑴＜子ども自身のスポーツ＞に見る人間関係[13]に関係する資料は1996年８，９月鹿児島の公園での参与観察から抽出した。

⑵＜子ども形成のスポーツ＞にみる人間関係に関する資料は1996，７年の全九州ミニバスケット選手権大会，南九州チビッコサッカー大会の参与観察から抽出した。

⑶＜子ども形成のスポーツ＞にみる人間関係に関する資料の③は1998年４－８月鹿児島市少年団の参与観察から抽出した。

Ⅲ　社会的スキルと体育・スポーツへのアプローチ

社会的スキルは一般的には，対人関係を円滑にし，社会生活に適応していくために，相手のとる行動の変化を正確に認知するとともに，それに応じて自己の行動を調節する心理的機制と定義されている[3]。このような社会的スキルを形成するには必然的に子どもが他の人々と多様な人間関係を持つ機会が必要となる。従って，社会的スキルを研究したり検討する際には，一つは体育・スポーツの世界で如何なる社会関係がなされているのかとい点に，二つは子どもが参与している体育・スポーツ文化が子どもの社会的スキルを形成する構造をもっているかという点に焦点を合わせることが重要となる。これまでに，体育・スポーツ文化の構造と子どもとの関係に関しては若干の報告がなされている。G. George[4]，L. David[5] 更に D. Cavaillo[6]，種村[7] 等は，大人がコーチをする組織的スポーツへ子どもが参与した結果，現代の工業社会が要求する態度が形成させたり，疑似社会である組織的スポーツ社会での活動が社会化の有効な手段であると述べる。他方，B. G. Ingham[8]，J. J. Coakler[9]，山本[10] 等は組織的スポーツは，子どもの相互行為が制限され子どもの主体性を生かし得ない構造を持っていることを指摘している。只，いずれも社会的スキルに焦点を絞り分析を進めていないから，社会的スキル形成に組織的スポーツが有効なのか，未組織的スポーツが有効であるかは今後に残された課題である。

社会的スキルは会話を始めたり，質問したり，自己紹介したりするようなコミュニケーションに関わる基本的なスキルから，状況を判断したり，自己の感情を処理したり，対人関係の葛藤を処理したりするといった高度なスキルまでの多様なものがある[11]。いずれのスキルにしても子ども自体が他者に関わりを持つことが第一の要件となる。体育・スポーツの構造を子どもの他者関係の視点から構造化し，そのなかで子どもがどのような他者関係を持つことが可能であるかを分析することが大切となる。遊戯，ゲーム，スポーツを包摂し，かつ大人文化との関係をも含み，子どものスポーツ社会全体をコスモスとして構造化した＜子どもスポーツのコスモロジー[12]＞（図１）はスポーツ社会での人間関係を分析する上では有効な枠組みである。コスモロジーのどの空間の遊戯文化に子どもが参与しているかを特定できれば，その空間での人間関係が想起出来るからである。このような特性をもつ＜子どもスポーツのコスモロジー＞は，広義には子どもスポーツを生成する源としての＜子どもの内なる宇宙＞，その表現形態としての＜子ども自身のスポーツ＞，そして子どもスポーツを取り巻く上位の＜スポーツ社会＞，後者２つにまたがる＜子ども形成のスポーツ＞から構成される子ども独自のスポーツ社会を言う。以下，簡単に構成要素に触れておく。

＜子どもの内なる宇宙＞；社会的存在が保証された空間で子どもの身体的特性，認知的特性に強

く影響される感覚や思考を基にした子どもの心の世界を言い，大人の思考を越えるイマージネーションによる想像や創造がみられる。

＜子ども自身のスポーツ＞；子どもが＜子どもの内なる宇宙＞を基に社会化過程でのスポーツを解釈した意味体系に従って創りあげたスポーツをいい，インフォーマルスポーツ等が相当する。

＜子ども形成のスポーツ＞；スポーツ社会や社会を担うに必要な知識，技術，価値を内面化することを目的としたスポーツであり，大人の指導のもとにある地域のスポーツクラブ，学校体育が相当する。

＜スポーツ社会＞；＜子ども自身のスポーツ＞や＜子ども形成のスポーツ＞を包み込む上位のスポーツ空間であり，大人のスポーツ社会やスポーツ・マスメディアの世界等が相当する。もちろん，この社会には子どもも存在している。

さて，現実の子どもスポーツと＜子どもスポーツのコスモロジー＞を社会的スキルと関連させて簡潔に説明すると以下のようになる。すなわち，子どものスポーツ世界としてのサッカーの大会は，⑴大会までの練習，⑵会場までの道のり，⑶会場，⑷試合前の練習，⑸試合，⑹表彰式，⑺試合後の反省，⑻大会後の練習で構成されている。社会的スキル学習の機会である＜子ども－子ども＞関係，＜子ども－大人＞関係はこの８つの場で生じている。更に，これらの関係の内容は，８つのそれぞれの場での人間関係が＜子どもスポーツコスモロジー＞のいずれの空間に位置づくかにより異なり，結果として社会的スキルが異なった様式で形成されることになる。

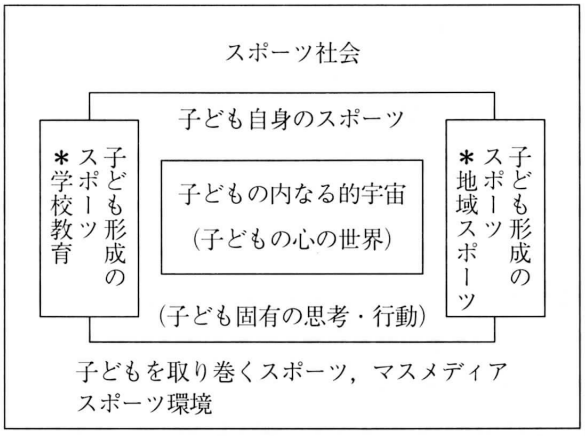

図１　子どもスポーツのコスモロジー

Ⅳ　社会的スキル形成の現状

１＜子ども自身のスポーツ＞に見る人間関係[13)]

①　公園で子どもが野球ゲームを行っている。年齢は９歳から10歳位で人数は14名である。顔の前を通過した投球が誰がバッターであるかによってストライクと判定されたり，ボールと判定された

りする。集団のなかの権力の強い子どもが「ストライク」と叫び，他の２，３名の同意者があれば，フォーマルなルールではボールである投球がストライクと判定された。権力の強い子どもは特定の子どもの限り「ストライク」と主張する場合は多い。野球以外の生活場面での両者の人間関係がルールの判定に大きく影響を与えている。

② 一人の子どもが打ったボールが大きな飛球となって公園の外に飛び出すかに見えた。残念ながら公園と道路との堺にある大きな木に当たり，ボールが落下してきた。ボールを追いかけていった外野手が落ちてきたボールを直接補給した。「アウト」と叫んだ外野手に対して，「木に当たったからホームランだよ」という意義が申し立てられた。しばらく，喧々合号言い合っていたが，最終的には，ファールボールということで合意が成立した。

③ 守備についている野手は左手にグローブをつけているが，右手にはほとんどの者がアイスキャンデイを握り，ときどき口に運んでいる。ボールが飛んでくるとアイスキャンデイをすばやく口にくわえ空いた手でが補給したボールを投げている。時には投げ損じたり，エラーをしたりする。しかし，誰もアイスキャンデイを持っていることを非難しないし，また持つことを止めようともしない。

以上は公園での＜子ども自身のスポーツ＞に対応するゲームの観察のひとつの事例である。夕方，暗くなりゲームは終ったが，大人のようにゲームが中断されたり試合放棄されることはなかった。ゲームを継続することは人間関係を維持していくことである。欲求の対立があっても，自己主張で対立しても，自己犠牲や交渉や和解により人間関係は継続していく。その過程で社会的スキルは形成されていく。事例①でみるゲームでの人間関係はゲームの後の日常生活での付き合い方へと子どもの思念を広げ，自己犠牲，相手への譲歩などを学習する機会となっている。事例②は相互交渉や和解の学習の機会を与え，例示③はある状況下でお互いを認め合うことを学ぶ機会となる。このように＜子ども自身のスポーツ＞は＜子ども－子ども＞関係を多様に経験する機会を多く持っていることが分かる。

２＜子ども形成のスポーツ＞にみる人間関係

④ 「いいぞ！ナイスディフェンス」「５番いい走りだ」「７番ナイスパス，そうだそうだ。ナイスラニング，いいポジションだ」。監督はコートサイドから子どものプレイを見ながら，子どものいいプレイが生まれる度に大声をあげている。フリースローのチャンスがきた。「５番，さっきのように・・・。しっかり思いだして。ナイスシュート」。舞台の演出者みたいな身のこなし，声の掛け方だ。ハーフタイムの時間がきた。「ね！監督みてた。最初の時，フェイントしたのでパスだせたと思うんだけど・・。失敗しちゃったよ。なぜ。監督見てた！」。コートから帰ってきた子どもの顔が生き生きとしていて，みんな監督に何かを聞きたそうだ。「あのね，顔と身体の向きはその時どうだったかおぼえてるか。そこだな，ポイントは。よく考えてよ」(1996年九州大会ミニバスケットボール)。

⑤ 「なにやってんだ！外だよ。外。何回言えば分かるんだ」「違うよ，スルーパスだろ，スルー

パス，この馬鹿たれが」「また，止まってる。走るんだろそこでは，何回言わせるんだよ」。すざましい指示が絶え間なくコートの選手へ飛ぶ。ハーフタイムになった。選手は顔をこわばらせて監督の前でじ－っとうつむいている。「はい」「はい」の言葉以外に応答はない。組織的スポーツは理論的で合理的プレイが要求される。どういう戦術をとればいいのかや技術をどうのばすかに関しては監督の方がはるかに詳しい。失敗したプレイの指示に対しては「はい」「はい」以外に応答のしようがない（1997年南日本チビッコサッカー大会）。

＜子ども形成のスポーツ＞では＜子ども－大人関係＞でのやり取りが多くみられる。そしてここでの人間関係は，子どもの社会的スキルの発達に大きな影響を与える。例示④の場合は子どもの自己主張が認められ，質問ができ，状況判断ができる機会に恵まれている。一方，例示⑤では結果として失敗したとしても，子どもは自分の状況判断によりプレイしたのだから子どもなりの考えがあるにも関わらず，一切の自己主張が閉ざされたケースである。自分の感情の処理をするのも社会的スキルの内容ではあるが，そのようなスキル以前に権力に迎合するスキルが形成される危険性がある。

⑥　Hサッカーチームは春の大きな大会に優勝し，６月下旬の全国少年サッカー大会で代表校を目標としている。チームは30名であるがはっきりと一軍と二軍に分離されている。指導者もそれぞれ担当者が異なっている。練習は毎週３日間である。驚いたことに一軍と二軍の子どもの交流は全くなく，一軍にいる５，６年生間でも２，３人単位での言葉のやり取りはあるが，全体で何かを解決する為にあるいはどうすればうまくなるかを巡って子ども同士が話合う場面は殆ど見られない。形式的には異年齢集団であるが実質にはその構造をもってなくて，成員間の相互交渉もほとんどみられない。監督の指示を忠実に実行するだけで，フォーメイションの練習の時，若干の会話が見られるだけである。

例示⑥は子どもが参与しているスポーツ集団の典型的な例であるが，このように練習場面にのみ焦点をあわせ観察をすると，スポーツ集団で社会的スキルが形成される可能性は少ないように見える。しかし，少年サッカーの全国大会の上位チームの子ども達は，キャプテンを中心にして練習，試合を通じて必死に意見交換をし目標を定めていた。例示④のミニバスケットチームにあるように組織的スポーツでも子ども自身に自分の考えを主張できる雰囲気ができると社会的スキルを形成する可能性は高くなる。観点を変えれば，＜子ども形成のスポーツ（ここでは少年サッカー大会を例とする）＞で，子どもが他の子と話し合ったり，大人と交渉を持つ機会は⑴大会までの練習，⑵会場までの道のり，⑶会場，⑷試合前の練習，⑸試合，⑹表彰式，⑺試合後の反省，⑻大会後の練習という多くの空間で生まれる可能性がある。このいずれの空間も子どもが社会的スキルを伸ばせる場となる。特に監督の目が届かない⑵会場までの道のり，⑶会場，⑺試合後の反省では選手間でのやり取りや異年齢間での話が盛んに行われ，その内容はサッカーを越えていろんな話題へと広がり，スポーツ集団での仲間関係は，日常生活までに及び＜子ども自身のスポーツ＞での相互行為に近い形へと発展している。

⑦ 「ウォーミングアップ，練習，演技，移動，演技，・・・，クーリングダウンという時間の流れに沿って，子どもの表情に幾度となく子どもの顔と大人の顔が表れては消えてゆく。真剣な練習でコーチから声をかけられ「はい」と答える仕草やうまくできた時の表情は，子どもの顔そのものであり，見るものの心を和らげてくれる。しかし，演技のコールがなされた瞬間にそれらの表情は，一転して鋭利な眼で演技の始めから終わりまでを見通すかのように冷たく眼がすわった大人の表情へと変化し，周囲の和らいだ雰囲気までもころしてしまう。」[14] ＜子ども形成のスポーツ＞で大人と対当に戦いを演じている特定のスポーツの子どもには，大人と子どもの境界がない。彼等は全く同じ条件のもとで子ども故のハンディもなくスポーツという文化の中で大人と全く対当の存在である。過酷な大人との戦いに挑戦する子どもの生活は，極端に練習中心であり普通の子どもの生活構造とは異なっている。従って，誤解を恐れずに言えば，彼等は極端に限定された社会関係，絶対的な権力をもつ大人との相互交渉の空間で社会的スキルを形成してゆく。トップアスリートとしての子どもの社会的スキル形成については，もっと広く子どもの存在という視点から分析を進める必要がある。

V おわりに

いくつかの参与観察から得た典型的な事例をもとに若干の解釈をしたにとどめた。結論的には＜子ども自身のスポーツ＞に子どもが多くの社会的スキルを伸ばす機会があることがあることが明らかになった。また，組織的スポーツと未組織的スポーツのいずれが社会的スキルを形成するうえで有効であるかというこれまでの対立についても，未組織的スポーツが有効であるという結論が導き出せた。

ただ，組織的スポーツでは社会的スキル形成が不可能であるかということではなく，＜子ども形成のスポーツ＞（組織的スポーツ）では大人の子どもへの関わり方により，社会的スキル形成の機会は，縮小もすれば拡大もするということが明らかになった。組織的スポーツや体育・スポーツで形成された社会的スキルは，学校空間，家庭空間で相対化され客体化され，同時に他空間で形成されたそれらはスポーツ空間で相対化，客体化される。現代の子どもに欠けているといわれる社会的スキルは，決して一つの空間で形成されるものではない。その意味で今回の結論は，スポーツ社会での社会的スキルにとどめた限りのものであり，そこで形成された社会的スキルが子どもの日常生活空間へ転移するか否かは，今後，他の生活空間での社会的スキルとの関連を分析することで明らかになろう。

注および参考文献

1）F．アリエス著　杉山光信他訳 「子どもの誕生」 みすず書房　1980.
2）高橋伸子著 「テクストの子ども：デイスクール・レシ・イマージュ」世織書房　1993.
3）岩田純一他編　発達心理学辞典　ミネルウア書房　P.299 1995.
4）Rich, George & others “Demystifying the Concept of Culture ; A Teacher's Guide to the Cross-Cultural

Study of Game and Play." California state uni. 1978.
5）Larson David L. "An Analysis of organized Sport for Children." Physical Educater. Vol. 33. No.2. pp. 59-62. 1976.
6）Cavallo Dom. "Social Reform and the Movement to Organized Children's Play during the Progressive Era." Jouenal of Psychohistory. Vol.3(4), pp.509-522.1976.
7）種村紀代子　スポーツ教室参加児童のパーソナリティの研究　体育学研究　第25巻第1号　pp.1-11.
8）Berlage, Gai Ingham. "Middleclass Childhood: Building a Competitive Adventage or Early Burn out". Paper presented at RASS. 1983.
9）J. J. Coalley, "Play, Game and Sport: Development Implications for Young People." Annual, Meeting of Alliance for HPERD. 1979.
10）山本清洋　子ども文化としてのスポーツ概念の構築(1)—同化過程からみた組織的スポーツの特性—子ども社会学研究2号　日本子ども社会学会　pp.88-102　1996.
11）岩田純一他編　前掲書　P.299　1995.
12）山本清洋　子どもスポーツのコスモロジー　日本体育学会第48回大会号　1997.
13）山本清洋　スポーツと遊び　高橋たまき他編　「遊びの発達学」　培風館　pp.161-184　1996.
14）山本清洋　子どもとスポーツ—果敢なる勧告—　三考堂　1987.